

ドビュッシー(ダマーズ編):ベルガマスク組曲

全4曲からなる《ベルガマスク組曲》は、初期ドビュッシーのピアノ独奏曲。1890年頃の作曲だが、後年改訂され、1905年に出版。フルート、ヴィオラ、ハープのための編曲は、フランスの作曲家・ピアニストのジャン＝ミシェル・ダマーズによる。母がハープ奏者だったためか、ハープの用い方が素晴らしく、作品に華やぎを与えている。

フォーレ:夢のあとに

フォーレの歌曲のなかでも広く親しまれている佳品。トスカーナ地方に伝わる詩を、パリ音楽院の同僚でもあったロマン・ビュシーヌがフランス語へ自由に翻訳したものに作曲。美しい夜の幻影を夢見る甘美な旋律と、それが目覚めによって消えてしまう悲痛な思いが心を打つ。

サティ(武満 徹編):《星たちの息子》より 第1幕への前奏曲「天職」

サティの劇音楽《星たちの息子》は1891年、サール・ペラダンの神秘劇のために作曲。本来は複数のフルートと複数のハープのための作品だが、現存するのはサティ自身が編曲したピアノ独奏版のみ。武満はその版をもとにサティへの原点回帰を意図して、1975年にフルートとハープのために編曲を行なった。

武満 徹:そして、それが風であることを知った

エミリー・ディキンソンの詩からタイトルを採った、フルート、ヴィオラ、ハープのための1992年の作品。主題となっているのは「眼に見えない、風のような、魂の気配」であると作曲者は語っている。本公演でも演奏されるドビュッシー最晩年の三重奏ソナタと同じ編成である。

イベール:2つの間奏曲

パリ生まれの作曲家ジャック・イベールは、パリ音楽院では「フランス6人組」のミヨーやオネゲルと同窓で、軽妙洒脱な作風で知られる。本曲は1946年に作曲されたフルート、ヴァイオリンとピアノのための作品。第1曲はゆったりとした抒情的な曲、第2曲は一転してスペイン風の音楽となり、ハープの伴奏に乗って、情熱的な旋律が舞う。

ジョリヴェ:小組曲

フルート、ヴィオラ、ハープのために書かれた本組曲は1941年、ジョリヴェが36歳頃の作。第二次世界大戦中のジョリヴェには、調性にもとづく抒情的な作品が多く、本組曲もジョリヴェのラディカルな顔とはまた違った印象を受ける。5つの小曲が並べられており、ノスタルジックな旋律に癒される第1曲、異国情緒がほのかに香る第2曲、奇妙な生き物がうごめくような第3曲、息の長い旋律に添えられるハープの響きがどこか懐かしい第4曲を経て、祝祭的な明るい雰囲気第5曲フィナーレで曲を閉じる。

ドビュッシー:フルート、ヴィオラとハープのためのソナタ

ドビュッシーは最晩年に様々な楽器編成による6曲のソナタを計画した。しかし作曲者の死

によって3曲しか実現されなかった。その2曲目にあたるのがこのソナタで、1915年の作。編成のめずらしさ、姿を変えて循環する主題、透明感のある美しさなど、充実度が高く、完成した三つのソナタの中では最も規模が大きい。第1楽章パストラル(牧歌)は、三部形式。冒頭のハープに導かれてフルートが奏する基本主題が曲全体を貫く。第2楽章の間奏曲は、変則的な複合三部形式。朗らかな舞曲のような喜びにあふれている。第3楽章フィナーレは、三部形式。一変して冒頭から緊張感をはらむ展開となり、激しさを増していくが、コーダでは第1楽章冒頭に回帰し、来し方を振り返るように別れを告げる。